

産総研に保管されていた桜島火山画像と2006年6月に噴火した昭和火口

＜川辺 禎久・中野 俊＞

桜島火山大正噴火などの桜島火山の地形、噴火時、および噴火後の調査時に撮影されたガラス乾板が産総研に旧地質調査所時代から保管されていたことが明らかになりました。

ガラス写真乾板は、大正噴火当時桜島火山の現地調査を行った、故山口鎌次氏が撮影したもので、旧地質調査所に保管された詳しい経緯は不明です。

記録された画像は、大正噴火前後に撮影されたものが主で噴火現象の生々しい画像のほか、昭和14年噴火で形成された昭和火口の噴火前後のものも含まれるなど、火山学的に貴重なものです。これら画像の一部を今年再活動した昭和火口の画像とともに紹介します。



写真1

大正3年噴火前の桜島と鹿児島市街

鹿児島市内城山から撮影された噴火前の桜島。中央右に大正溶岩に覆われてしまった鳥島が見える。



写真2

大正噴火で流出する溶岩流と噴煙

桜島火山は1914年(大正3年)1月12日に噴火を開始し、13日夕刻頃に溶岩流が流下し始めた。



写真3

噴気を上げる大正噴火西側火口列東端部

これまで詳細不明だった大正噴火西側割れ目火口列の東端火口の存在を示すもので、地溝状火口をわずかに溶岩流が満たし、盛んに噴気が上がっている様子が捉えられている。



写真4

昭和14年噴火直後の昭和火口

1940年(昭和15年)1月に大正噴火東側割れ目火口列から撮影した昭和火口。昭和火口は1939年(昭和14年)10月26日の噴火で形成された。1946年にこの火口から昭和溶岩流が噴出した。



写真5

2006年8月現在の昭和火口

2006年6月4日に昭和火口から噴火が発生し6月末まで噴火が続いた。写真は今年8月6日に写真4とほぼ同方向の一周道路上から撮影したものの、見比べると約70年間の地形変化がわかる。